

|               |                                       |
|---------------|---------------------------------------|
| 氏 名           | 松永 早苗                                 |
| 学 位 の 種 類     | 博士（看護学）                               |
| 学 位 記 番 号     | 第 3 7 号                               |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 令和 3 年 3 月 1 9 日                      |
| 学 位 授 与 の 条 件 | 学位規程第 3 条第 4 項該当                      |
| 学 位 論 文       | パンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラムの<br>開発 |
| 論 文 審 査 委 員   | 主査 安齋 由貴子<br>副査 菅原 よしえ、風間 逸郎          |

## 論文の要旨

### 【目的】

本研究の目的は、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難とその対処を明らかにし、その結果を基に準備教育プログラム試案を作成し、専門家から評価を得てパンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラム（以下準備教育プログラムと略す）を開発することである。

### 【方法】

研究の第 1 段階は、エボラ出血熱パンデミック発生時に国際支援を担った看護職と看護職以外の医療職に、看護職の困難と対処についての半構造化面接を行った。主に看護職の逐語録の内容から、困難と対処の記述内容に焦点をあてコードとした。コードの類似性や差異性に着目してサブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、比較継続して分析した。看護職以外の医療職の逐語は、看護職を客観的に捉えた内容として看護職のデータに追加した。

研究の第 2 段階は、研究第 1 段階の結果である看護職の困難とその対処を基に準備教育プログラム試案を作成し、準備教育プログラム試案について専門家からインタビューと評価表を用いて評価を得た。インタビュー内容は、質的帰納的に分析し、評価表は単純集計し、得られた準備教育プログラム試案の改善点を加筆修正し、準備教育プログラムの開発を行った。

倫理的配慮は、宮城大学研究倫理専門委員会（研究第 1 段階、承認番号：宮城大第 1208 号、2018 年 1 月 30 日）、（研究第 2 段階、承認番号：令和 2 年度 宮城大第 419 号、2020 年 8 月 27 日）の承認を得た。

### 【結果】

研究第 1 段階は、看護職 3 名、看護職以外の医療職 6 名から、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難として、【支援に行く前からの恐怖】、【根強い周囲の反対】、【現実化する恐怖】、【業務の過酷さ】、【感染を食い止められない無力感】、【支援後の心のアンバランス】、【活かされない教訓】の 7 つのカテゴリーが抽出された。パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難への対処として、【経験知を駆使して精神状態を保つ】、【周囲との折り合い】、【自分の身を守るための工夫】、【現地に即した柔軟な姿勢】、【心のアンバランスを調整】、【経験者として社会に発信】の 6 つのカテゴリーが抽出された。

研究第 2 段階では、研究の第 1 段階の困難と対処を基に、準備教育プログラム試案を作成した。準備教育プログラム試案は、パンデミック発生時に国際支援を担う看護職が置かれる

困難な状況を事前に、具体的に理解して、その対処を予期的に考え任務に向かう準備を整えることを目的とした。準備教育プログラム試案では、研究第1段階の困難のカテゴリーを活かした教材（動画、カード）を作成し、具体的に困難を理解してから、対処をグループで討議する方法とした。作成した準備教育プログラム試案は、6名の専門家から評価を得て加筆、修正し、準備教育プログラムとして開発した。

### 【考察】

パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の語りを基に準備教育プログラム試案を作成し、専門家から評価を得て、看護職向けの実践可能な準備教育プログラムとして使用できることが示唆された。

### 【結論】

パンデミック発生時に国際支援に担った看護職の準備教育プログラムを開発した。

キーワード：パンデミック，国際支援，看護職，準備教育プログラム

## 審査結果の要旨

本研究の目的は、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難とその対処を明らかにし、その結果を基にパンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラムを開発することである。

本研究は、2段階により実施し、まず第1段階では、パンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難とその対処を明らかにする質的帰納的研究を行った。パンデミック発生時の国際支援の事例としてエボラ出血熱を対象とし、看護職3名の協力を得た。国際支援を担った看護職は少ないことから、医師5名、薬剤師1名の計9名の協力を得た。看護職3名のデータを比較継続分析し、看護職以外の対象者には、看護職が置かれている状況について語ってもらい、分析時には看護職が直面した困難と対処の記述内容に焦点をあててコードとして抽出し、看護職のデータに補足して追加した。また、看護職3名にメンバーチェックングを行い、専門家にスーパーバイズを受けるなど厳密性の確保を行った。

その結果、看護職の困難として7つのカテゴリー【支援に行く前からの恐怖】【根強い周囲の反対】【現実化する恐怖】【業務の過酷さ】【感染を食い止められない無力感】【支援後の心のアンバランス】【生かされない教訓】、対処として6つのカテゴリー【経験知を駆使して精神状態を保つ】【周囲との折り合い】【自分の身を守るための工夫】【現地に即した柔軟な姿勢】【心のアンバランスを調整】【経験者として社会に発信】を明らかにした。

第2段階では、第1段階で明らかになったパンデミック発生時に国際支援を担った看護職の困難とその対処を基に、準備教育プログラム試案を作成した。困難をイメージさせる動画、トリアージカードやノンタッチルールカードなどの教材を作成し、また困難な状況を体験する実技を組み込んだ。対処についてはグループワークにより討議する方法を取り入れ、また第1段階で得られた結果を解説するだけでなく、全体のまとめとして困難や対処をグループワークで討議して自身の対処を整理できることを目標としたプログラムを作成した。このプログラムの信頼性、妥当性の検証として、専門家へのインタビューと評価表を用いて評価し、評価結果を基にプログラムを修正したことにより、信頼性、妥当性を確保した「パンデミック発生時に国際支援を担う看護職の準備教育プログラム」が開発できた。

パンデミック発生時に国際支援を担った看護職および医療職に協力を得て、第1段階、第2段階の研究を行った貴重な研究であり、また、昨年から続く新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中で、この教育プログラムは、支援に向かう看護職に対して、事前に、支援の困難を予測してその対応を考えることによって、支援者自身を守る対処や特殊な環境への心構えができる教育プログラムである。また、動画やカードなどの教材開発により、パンデミックが発生している現場を具体的にイメージした学習が可能であり、教育目標達成に有用

性の高い準備教育プログラムが開発できたと言える。

今後、看護職に準備教育プログラムを実施してその効果を明らかにし、さらに国内外のパンデミックに対応できる汎用性の高い準備教育プログラムとして発展できることも期待される。

この学位論文について対面審査を行い（令和3年1月13日），①研究の信頼性，妥当性，さらには有用性，新規性，独自性について整理してこの論文の特徴や限界を明確に述べることで，②いわゆるパンデミック発生時の国際支援というテーマと，とくにエボラ出血熱のパンデミック発生時の国際支援という関係性を明らかにして，論旨に一貫性のある論文になるように検討すること，③教育プログラムの教育目標と各学習および評価との関連を明確に示すこと，④プログラム内容の根拠を明確にしたプログラム開発プロセスを記述すること，⑤論文全体について論旨の一貫性に留意し，推敲を重ねることなどを指摘した。その後，上記の指摘事項について論文が修正されたことが，概ね確認できた。

本学位論文は，現在パンデミックのさなかにある新型コロナウイルス感染症のみならず，今後も起こりうる新興・再興感染症の流行時に支援を担う看護職への準備教育プログラムとして活用しうるプログラムを開発したものであること，国内外で活用しうるプログラムであることから国際的視点があり，また，独創性，発展性，新規性を有している。以上のことから，審査委員会は，博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。